

取材の談話とテレビニュースの談話の比較

——「国語に関する世論調査」に対する専門家の解説の
再構成のプロセス——

大 場 美 和 子

1. 研究の目的

本研究の目的は、専門家に対するテレビ局の取材時のインタビューのやりとりが、編集されてテレビニュースに引用された結果、いかに取材の場面における実際の相互行為の文脈を離れてテレビ局側の現実として再構成されているのかについて、取材の談話とテレビニュースの談話を比較することによって明らかにすることである。具体的には、大学教員（筆者）が日本語の専門家として実際に「国語に関する世論調査」の取材を受けた場面の録音・録画データと、その取材が編集されて放送されたテレビニュースの録画データ、という2つのデータを比較する。この比較により、専門家の解説がどのように再構成され、その再構成にはどのような特徴があるのかを明らかにする。

筆者の担当した社会言語学の授業で「国語に関する世論調査」のニュースのイメージを受講生に問うと、街頭やスタジオで慣用句等のクイズが行われた後に、書架を背景に専門家が解説を行うというパターンが共通して指摘された¹。世論調査や専門家の役割に対するステレオタイプが、テレビニュースによって形成されたものと考えられる。また、定延（2008）は、言葉の専門家は間違いを指摘して正解を述べることが求められており、その期待に応えなかったために「テレビ的でない」と指摘された経験を紹介している。つまり、番組を制作するプロセスにお

いて、固定的な役割配分に対するテレビ局側の過度の期待に起因する相互行為があったことを指摘しているといえる。メディアは事実をそのまま反映するのではなく、独自の様式で現実を再構成しているということは既に指摘されており、メディア・リテラシーの教育の重要性も主張されている（鈴木編 1997）。本研究では、会話データ分析²（中井 2012）の手法を用いて2つのデータの比較を行い、メディアによる現実の再構成とその特徴を明らかにする。そして、その結果をもとに会話データ分析の活動を取り入れたメディア・リテラシーの教育を実践することを提案する。

2. 先 行 研 究

本研究の目的は、「国語に関する世論調査」の結果に対し、テレビ局側のインタビューが大学教員という専門家に対して行われ、そのインタビューの一部を利用してニュースにおける現実が再構成された実態とその特徴を明らかにすることである。そこで、2.1において制度的談話としてのインタビューについて、2.2において発話の引用とメディアによる現実の再構成について、2.3においてその現実の再構成によって形成されるステレオタイプの修正の困難性について、先行研究を概観する。

2.1 制度的談話としてのインタビュー

制度的談話（*institutional discourse*）とは、特定の制度的規範への志向から、参加者間の固定的な役割によって相互行為が行われ、参加者の非対称的な関係が形成されうると指摘されており（好井他編 1999）、裁判、教室、マスメディア、医療場面などを対象に研究が行われている。多様なマスメディアの中でも、テレビニュースに関する研究では、ニュースの中のインタビューにおける質問と応答の継起によってインタビューが共同構築されると指摘されている（Clayman and Heritage 2002）。つまり、

固定的な役割関係のインタビュアーとインタビューイにより定式化された質問と応答が行われ、中立性を保とうとするとされている。

本研究の取材の場面におけるインタビューも、取材者が質問を行い、専門家もその質問に対する情報提供を行って撮影に協力するという相互行為が期待される。ただし、取材の場面のインタビューはテレビニュースのような厳格な時間制限はなく、取材内容は放送前の編集でテレビ局側が情報の取捨選択を行うことが可能である。よって、同じ「インタビュー」であっても、取材の場面におけるインタビューは、インタビュアーと専門家が協力的に現実を再構成する必要性が、テレビニュースの中におけるインタビューよりも低くなると考えられる。つまり、取材の場面のインタビューは、参加者の固定的な役割関係に起因する定式化された質問と応答が維持されない可能性がある。

2.2 発話の引用とメディアによる現実の再構成

鎌田（2000: 17）は、引用を「ある発話・思考の場で成立した（あるいは、成立するであろう）発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為である」とし、引用動詞の構文論的分析、直接・間接話法やこれらに影響するモダリティなど多角的な分析を行い、その中で「引用句創造説」を主張している。つまり、引用とは、伝達者が元の発話をそのまま復元したり、演技的模倣をしたりしているのではなく、伝達の場において、聞き手や被言及者など伝達の場を構成する要素に応じ、伝達者の表現意図によって主体的に選択して生成する活動であると指摘している（鎌田 2000）。鎌田（2000）は、日常生活の引用に関する研究であるが、取材で収録されたインタビューをニュースで使用することも直接引用と同様の現象であると考えられる。そして、取材の場面の発話が直接引用で使用されていても、ニュースの視聴者、ニュースの登場人物、他の映像や文字情報などのニュースを構成する要素によって、取材の場面の発話とは異なる文脈で新たな現実が、ニュースの談話では再構成されると

予測される。

多様なメディアの中でも、テレビニュースを対象とした研究も数多く行われている（伊藤編 2006, 大石他 2000, 小玉編 2008, 萩原編 2007, ニューマン他 2008）。また、ニュース・テキストの談話を対象とした「言説分析 discourse analysis」（岡井 2004）の手法では、テレビニュースに埋め込まれたイデオロギーや権力構造等が指摘されている。ただし、その多くは放送された番組間の比較による分析である。テレビニュースの制作のプロセスにおいて専門家が固定的な役割の遂行を求められ、その役割を遂行する相互行為の一部を利用してテレビ局側の現実が再構成された実態を解明するには、放送されたテレビニュースの録画データと、その番組を制作するプロセスにおいて記録したデータを比較する必要があると考える。ただし、テレビ番組の制作のプロセスに関する研究はドキュメンタリーを対象としたものが多く、ニュースが対象であっても番組内容の事後検証や制作現場の作業の記述が多い（飯田他編 2005, 大石他 2000, 山登 2000, 草野 2000）。タックマン（1994）は米国のニュース制作のプロセスを参与観察によって社会的に記述しているが、制作のプロセスの実際の録音・録画データを対象に、会話データ分析の手法から現実の再構成のプロセスの実態を明らかにした研究は殆どみられない。本研究は、大学教員が専門家として実際に取材を受けた場面の録音・録画データと、その取材が編集されて放送されたテレビニュースの録画データ、という2つの会話データを比較し、発話の引用関係と現実の再構成を分析する点に特徴がある。

2.3 ステレオタイプの修正の困難性

小林他編（2000: 162）は、ステレオタイプを「なんらかのカテゴリーもしくはグループ（集団）を基礎にして形成されている単純化された認識枠組みであり、固定的な概念・イメージである」とし、その修正は困難であるとしている。ニュースに限らず、マスメディアという制度的談

話から再構成された現実や参加者の役割にもステレオタイプが形成・固定化され、容易には修正されにくいものと考えられる。本研究では、取材の場面において専門家が専門家としての役割をどのように求められたのかその相互行為を会話データから具体的に提示し、さらにそれがニュースにおいてどのように再構成され、ステレオタイプの形成につながっているのかを探る。

3. 調査の概要

本研究では、「取材の談話」と「テレビニュースの談話」という2つのデータを比較する。まず、取材の談話は、大学教員（筆者、30代女性）が大学所在地の民放局から「国語に関する世論調査」に関する解説を求められ、研究室で約2時間に亘って行われたインタビューの録音・録画データである（1時間53分34秒、2008年7月30日）。取材の依頼は2日前の電話による³。取材はインタビュアーとカメラ担当の2名（ともに30代男性）によって行われたが、カメラ担当者は殆ど発話していない。次に、テレビニュースの談話は、夕方の地域のニュース番組（2時間10分）の録画である（2008年8月5日）。当初、放送は8月1日の予定であったが、内閣改造のニュースが入ったために延期となった。つまり、放送日の前日に取材が予定されていたということであるが、取材者によると普通の取材のスケジュールであるとのことであった。テレビニュースの談話における「国語に関する世論調査」のニュース（以下、本ニュース）は9分28秒で、専門家の発話は約2時間の取材から54秒引用されている。

図1は、①取材の談話（1時間53分34秒）、②テレビニュースの談話（2時間10分）、③「国語に関する世論調査」のニュースの談話（9分28秒）、④専門家の解説（54秒）の関係を示している。①取材の談話におけるインタビューの発話をもとに、④専門家の解説が作られている。2時間10分の②テレビニュースの談話において、③「国語に関する世論調査」

のニュースは9分28秒にすぎない。さらに、その約9分28秒の中で④専門家の解説は54秒である。つまり、④の54秒の解説の発話のため、①の2時間の取材が行われたということである。

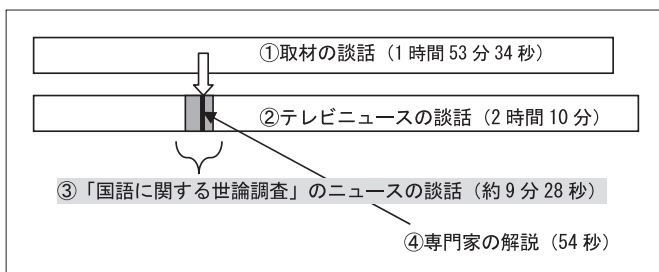


図1 取材の談話，ニュースの談話，専門家の解説の関係

文化庁文化部国語課（2008）によると、平成19年度の「国語に関する世論調査（以下、世論調査）」は、2008年3月に、全国の16歳以上の男女に対して調査員による面接聴取法によって行い、有効回答数は1975件とある。調査項目は、(1) 言葉遣いについて、(2) 国語力について、(3) 外国人とのコミュニケーションについて、(4) 外来語の定着度について、(5) 慣用句等の言葉遣いについて、とされている。ただし、本ニュースで取り上げられたのは、(5) 慣用句等の言葉遣いについて、のみである。

4. 分 析

本研究では、まず、「国語に関する世論調査」のニュースの構成の分析を行い、本ニュースにおける世論調査の現実の再構成のされかたの実態を提示する(4.1)。次に、取材の談話とニュースの談話を比較し、2つのデータの引用関係の実態を提示する(4.2)。

4.1 世論調査のニュースの構成の分析

まず、本ニュース（9分28秒）を、シーン（スタジオ、街頭調査、専

門家の解説)によって分け、各シーンにおける構成要素(時間、登場人物、映像/音声情報、文字情報)を記述した(大場 2010)。表1は、6つのシーン別に、時間(シーン開始時刻と所要時間)、登場人物、内容を提

表1:「国語に関する世論調査」のニュースの構成

【1:スタジオ】: 5:26 pm (12秒)	
人物	FMC
内容	・予告「日本語の使い方、間違っていますか?」との問いかけ
CM: 5:26 (1分31秒)	
【2:スタジオ】: 5:28 pm (30秒)	
人物	MMC, FMC, MCM
内容	・導入 世論調査の結果(一部)の紹介 「みなさんは大丈夫でしょうか?」との問いかけ
【3:街頭調査(録画)】: 5:28 pm (2分42秒)	
人物	中年女性2名, 中年女性1名, 女子学生3名 女子生徒2名, 中国人女性1名とその娘らしき女の子1名 男性会社員2名
内容	・正誤判断:「煮詰まる」「さわり」「撫然」
【4:スタジオ】: 5:31 pm (3分41秒)	
人物	MMC, FMC, MCM
内容	・正誤判断:「足をすくわれる/足下をすくわれる」 「役不足」「確信犯」「敷居が高い」「檄を飛ばす」
【5:専門家の解説(録画)】: 5:35 pm (54秒)	
人物	専門家(大学教員)
内容	・意味の変化に関する解説
【6:スタジオ】: 5:36 pm (1分29秒)	
人物	MMC, FMC, MCM
内容	・まとめ 世代差, 反対意見の紹介 「みなさんはどう思われるでしょうか?」との問いかけ

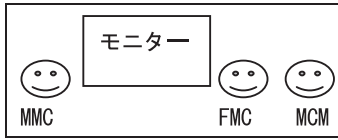


図2 ニュースのスタジオの画面

示している。街頭調査の登場人物計12名の属性は、字幕で「中国出身」と出た女性以外は外見から判断して記述している。なお、本ニュースでは、男性キャスター（MMC）中心に進行し、女性キャスター（FMC）と男性コメンテーター（MCM）が補助的な発話を行っていた。図2は、スタジオのシーンの2人のキャスターとコメンテーターの位置を示している。以下、各シーン別に、本ニュースの構成について述べる。

最初に、【1：スタジオ】で、前のニュースの最後に本ニュースの予告を行い、「日本語の使い方、間違っていますか？」とFMCが視聴者に問いかけてすぐにCMとなる。

次に、【2：スタジオ】で、MMCから、今回の世論調査では本来の意味とは異なる意味の使用例があったという結果が紹介され、「みなさんは大丈夫でしょうか？」と視聴者に問いかけがなされる。

【2：スタジオ】の問いかけに続き、【3：街頭調査】と【4：スタジオ】で慣用句などの正誤判断をクイズ形式で行う。シーンは異なるが、クイズとその正答が提示される点は共通する。また、2つのシーンで6分23秒と本ニュース全体（9分28秒）の3分の2の時間を占める。なお、本ニュースにおいて、【3：街頭調査】【4：スタジオ】でクイズとして提示された表現が、世論調査の結果の一部であるという説明はなく、世論調査が慣用句などの正誤判断のみを扱っているかの印象を与える。

例(1)～(3)は、【3：街頭調査】におけるニュースの映像／音声情報と文字情報である。【3：街頭調査】では、まず、画面に例(1)の文字情報が提示され、MMCが正誤判断を視聴者に問いかける。次に、街頭調査の録画映像が提示され、例(2)のように登場人物が問題に答える。最後

に、例(1)の文字情報に、「○/×」の情報が追加された正答が提示される(例(3))。【3:街頭調査】では、「煮詰まる」「さわり」「無然」の3つの表現について、同様の正誤判断のやりとりが繰り返される。

例(1) 文字情報 【3:街頭調査(録画)】

煮詰まる

①結論が出る状態になる

②結論が出ない状態になる

例(2) 映像/音声情報 【3:街頭調査】

女子学生A: こっち, こっち。

男性会社員: 話が出ない状態になる場合に煮詰まったっていう話をしますってかはい。

女子生徒A: 下だと思えます。

女子生徒B: 下だと思えます。

中年女性A: 無い状態。

中年女性B: こっちのほう。

(以下, 略)

例(3) 文字情報 【3:街頭調査(録画)】

煮詰まる

○ ①結論が出る状態になる

× ②結論が出ない状態になる

次の【4:スタジオ】も【3:街頭調査】と同様に、「足をすくわれる/足下をすくわれる」「役不足」「確信犯」「敷居が高い」「檄を飛ばす」という5つの表現の正誤判断となる。ただし、【3:街頭調査】では街頭の人が回答したが(例(2)), 【4:スタジオ】では回答者はなく、正誤判断

は視聴者にゆだねられる。なお、5つの表現のうち、「役不足」「確信犯」「敷居が高い」の3つは文化庁文化部国語課（2008）に調査結果としては掲載されていない。よって、【3：街頭調査】【4：スタジオ】の正誤判断（計8例）の結果を紹介する際に、実際の世論調査における2つの回答の選択率を提示する例（例（4）（5））と提示しない例（例（6））がある。世論調査で回答率に差が出た表現だけでなく、世論調査で扱っていない表現も合わせて本ニュースで使用することで、本来の意味とは異なる意味で使用されている表現があるということを強調しようとしていたのではないかと考えられる。

例（4）文字情報 【4：スタジオ】

煮詰まる

- ①結論が出る状態になる……56.7%
- × ②結論が出ない状態になる……37.3%

例（5）文字情報 【4：スタジオ】

- 足をすくわれる……74.1%
- × 足下をすくわれる……16.7%

例（6）文字情報 【4：スタジオ】

- × 水準が高くて手が届かない
- 心にやましい所があって行きづらい

【3：街頭調査】【4：スタジオ】の正誤判断によって表現の意味が変化することを提示した後に、【5：専門家の解説】となる。MMCは解説前に「理由があります」と慣用句などの意味が変化する理由があると明言し、その解説が専門家によって行われると予告する（例（7））。直後に、取材の談話の映像が流れ、専門家の解説となる（例（8））。この解説の後、

【6：スタジオ】においてMMCは「えーつまり～というふうな、あー説明なんですよ」という専門家の解説の単純な要約を行う（例（9））。

例（7）映像／音声情報 【4：スタジオ】

MMC：えーこうして意味がどんどん変わっていくというのもこれ一ひとつ流れがあるんですけども理由もあります、えー専門家に聞いてみました。

例（8）映像／音声情報 【5：専門家の解説（録画）】

- 01 その話してる時っていうのは、普通に一会話が成立一、コミュニケーションが成立して一何ら問題は発生していない。
- 02 だけど表面上何も起こってなかったのに一、2人の間で一、解釈が違ってることってかなりあります。
- 03 気づかない、会話ってすぐ消えてしまいますから、そんな誤解がちょっとずつ起こって気がついたらあらぬ意味の変化に。
- 04 70%とかの方々が一、こっちだ一って選ばれたのであるから一、この方達にとっては何ら問題なく。
- 05 語一そのものの意味よりも一、そこでのコミュニケーションの意思疎通を成立させることの方が重要であって、ある1つの語彙に対しては、管理を及ばせない、ということ。

例（9）映像／音声情報 【6：スタジオ】

MMC：えーつまり言葉というのはコミュニケーションの手段ですので会話をしている者同士意味が通じ合えばそれでいいと、まですから本来の意味というのはそういう場合は関係がなくなってしまうんだということで、多数が最終的に意味を決めていく要素があるというふうな、あー説明なんですよ。

最後の【6：スタジオ】は、専門家の解説をふまえて MMC, FMC, MCM のやりとりが行われた後、MMC が正誤判断にみられた世代差に対する意見、「国語の乱れ」に対する反対意見を紹介し、「みなさんはどうお感じでしょうか」と視聴者に問いかけて終了する（例（10））。なお、世代差に関する言及は、筆者が取材時に行ったものである。例（10）では、「～と一いうふうに話されていました」と引用の形式になってはいるが、実際の発話者は明言されていない。

例（10）映像／音声情報 【6：スタジオ】

MMC：えーまーそれは言葉の進化ととらえるのかあるいは退化なのかそのあたりはみなさまどうお感じになるのでしょうか、実は世代的な一違いがありまして先ほどの煮詰まるということばもですねご年配の方はわりと正解になるんですねー、つまり若い人との間のコミュニケーションが最近希薄になっているので正しい使い方がうまく若い人にも伝わっていかないと広がっていかないという面もあるんじゃないかと一いうふうに話されていました、言葉は時代によってかわるものだからと皆さんは思われるのでしょうか、39パーセントの方は乱れていないという方はそういう理由をあげていますけどもテレビをご覧のみなさんはどうお感じでしょうか。

以上、6つのシーン別に、世論調査のニュースの構成について述べた。全体としては、世論調査の結果の一部を使用した問題提起が視聴者に対して投げかけられ（【1：スタジオ】【2：スタジオ】）、その問題をクイズ形式の正誤判断で強調し（【3：街頭調査】【4：スタジオ】）、専門家が解説を行って問題を解決し（【5：専門家の解説】）、他の関連する情報が紹介されて終了となる（【6：スタジオ】）。この6つのシーンから、世論調査は慣用句等の正誤判断のみを行っているという印象、言葉の専門家は

言葉の問題を解決する役割という印象が演出されていると考えられる。つまり、世論調査と専門家の役割、という2つのステレオタイプを強調した現実がニュースで再構成されていると考えられる。

4.2 取材とニュースの談話の引用関係の分析

取材とニュースの談話の引用関係を見るため、約2時間の取材の談話を全て文字化し、内容、沈黙、談話標識等から37の話題に区分し、この37の話題を取材の流れによって5つ（[1] 雑談, [2] 雑談, [3] 雑談, [4] 撮影, [5] 撮影・雑談）の内容にまとめた（大場 2011）。表2は、この5つの内容、所要時間、話題数を示している。例えば、最初の [1] 雑談では、17分48秒の時間を費やし、11の話題が話されたことを意味する。話題数の「11 (6/5)」は、11の話題中、取材者（I）が6、専門家（T）が5つの話題を開始したことを示す。全37の話題中、Iが23話題で多いものの、Tによる開始も14例を占める。

取材全体の5つの内容は、まず、[1] 雑談で取材者のニュースの解説の撮影のための意図が説明される。しかし、[2] 雑談でニュースの解説に関してIとTで意見の不一致が判明し、妥協して解説の内容を決定する。この解説の妥協後も、[3] 雑談では世論調査や言語一般に関連する話題について雑談を行う。この時点ではほぼ1時間が経過する。次に、[4]

表2：取材の談話の内容・時間・話題数

内 容	所要時間	話題数（I/T）
[1] 雑談（Iの意図説明）	17分48秒	11 (6/5)
[2] 雑談（「解説」の意見の不一致と妥協）	11分53秒	2 (2/0)
[3] 雑談（関連話題）	25分53秒	9 (6/3)
[4] 撮影（解説）	13分05秒	1 (1/0)
[5] 撮影（書架／専門家カット）・雑談（関連話題）	44分55秒	14 (8/6)
計	1時間53分34秒	37 (23/14)

撮影で解説の撮影を行い、[5] 撮影・雑談で書架と専門家カットの撮影を行いつつ、世論調査や言語一般に関連する話題の雑談となる。つまり、ニュースで使用された54秒の解説の撮影は、取材を開始した1時間後に13分程度で収録しており（[4] 撮影）、その他の時間は殆ど世論調査や言語一般に関連する話題について繰り返し雑談をしていたといえる。

上記の分類をもとに、ニュースの談話における「専門家の解説」（例(8)）が、元の取材の場面ではどのように発話されているのかを特定したところ、元発話は世論調査に言及したとは言い難い実態が明らかとなった。前述のように、Iの取材の目的は、「憮然」「さわり」「煮詰まる」など、本来とは異なる意味で使用された理由を解説として専門家から得ることであった。しかし、その解説は安易にはできないとTは明確に断る。このため、IはTと言語一般に関する雑談を行いつつ、ニュースに使用できる「理由」を探る。以下、解説の撮影前・中・後に分けて会話例をあげ、どのように取材者の志向する専門家の解説を撮影していったのかについて述べる。

例(11)は、撮影前の雑談（[1] 雑談）においてIが解説に使える内容を探っているやりとりで、Iが質問を行ってTが情報提供を行うという制度的談話のやりとりに逸脱が発生する部分である。まず、Iが、人が「感覚的に言葉を使う」ために表現の意味が変化したというIの意見を述べる（244 I）。Iの意見に納得しなかったTは、感覚的ではない使い方とはどういうことかという逆質問を行う（245 T）。これにより、Iが情報提供を行い、Tがあいづちや繰り返しを行うという、取材の役割関係が逆転した現象となる（246 I - 252 I）。TはIの意見に納得できないことを再提示するが（253 T）、IはTに同意確認要求（254 I）を行って意見を主張する。

例(11) Tの逆質問と役割関係の逆転（撮影前）

244 I：感覚的に言葉を使ってるみたいなの（T：うんうん）ことも

あるんかなって。

245 T : 感覚的じゃない使いかたはじゃどういう使いかたですか。

246 I : ちゃんと意味を調べて。

247 T : うん。

248 I : 使ってる。

249 T : ちゃんと意味を調べて。

250 I : 辞書をひいて。

251 T : うん。

252 I : 意味を調べて。

253 T : うん、でもそんなことする人いたのかな古代から、うーん。

254 I : じゃけ変わるんでしょ。

次に、例(12)は、撮影前の雑談([2] 雑談)で、IがTの発話を聞いて解説として使用できると判断し、期待される解説とはどういうものであるかを述べる部分である。まず、Iが自らの専門の会話データ分析でフォローアップ・インタビューを行うと、会話参加者の解釈がずれることもあるという現象を紹介し、世論調査の意味のずれの生じた理由の1つとして会話の解釈のずれもありうることを述べる(383T)。すると、Iはその解釈のずれを解説として使用できると判断する(384I)。そして、視聴者が納得する内容が解説として期待される内容であると述べ(386I~396I)、Iの述べた意味の取り方がずれるという内容を繰り返して同意確認要求を行う(398I, 400I, 402I, 408I)。Tは「かなー」と述べて断定を避け(408I)、「であとはー」と言いかける(409T)が、Iの同意確認要求に遮られる(410I)。

例(12) 期待される解説の要求(撮影前)

383 T : だからーその人自身はーある意味でゆったとしてもー他の人は(I : はい)全然違う意味で(はい)捉えて(I : は

い) ることがよくあります (I : よくあると), データー
とってみてそのあとでわたしフォローアップインタビュー
を必ずしています (I : うーん) そーすっと, 解釈が全然
(I : はい), 表面上はこー会話は成立してるんですけどー
(I : はい) 個別に聞くと実はねっていうことすごーく多
く出てきます (I : うーんうーん) だからそーゆーずれ
はーインタビューしたからこそ研究者は気づきますけど,
当事者は全然知らないまま進んで (I : はい) いく, そんな
のが重なっていく (I : はい) ってゆーのがあるかと思
いますけど。

384 I : それでいきましょ。

385 T : はい↑。

386 I : それはわたしもいま聞いてすごく (T : ふーん) 納得がい
きました。

387 T : はい, どーですか。

388 I : 視聴者の人が。

389 T : うん。

390 I : 聞いて。

391 T : うん。

392 I : 聞いても分らんかったらすごいストレスだと思っ
たんですよ。

393 T : うーん。

394 I : 聞いてあーなるほどなというのが。

395 T : うーん。

396 I : いい答えだと思っ
たんですよ, 私今聞いてて。

397 T : うん。

398 I : やっぱり会話っていったら。

399 T : うん。

400 I : もう意味の取り方が。

401 T : うん。

402 I : 絶対ずれますよね。

403 T : ええ。

(中略)

408 I : 多分、ずれてくんですよ (T : かなー), そうですよ。

409 T : であとはー。

410 I : 先生のご専門だとそういう答えですよ。

例 (12) の後、インタビュー形式で妥協した解説の内容を再現して解説の撮影となる ([4] 撮影)。例 (13) は、解説の発話01~03の出現部で、下線部はニュースの被引用部である。まず、Tが「私は普段会話分析をして」と専門の説明を始める。その専門の説明において、会話時に問題が発生していなくても、後のフォローアップ・インタビューで参加者間の異なる解釈が判明することもあると述べる。つまり、解説の発話01と02は、Tが行う会話分析の説明に関する言及部分である。次に、その会話分析の経験から、ある表現の意味が変化することもありえるのではないかと述べる。ただし、その発話後に「ってことも～と思いますけど」とふざけて断定を避け、あくまでも可能性として述べている。

例 (13) 異なる言及対象の利用・モダリティの削除 (撮影中)

864 T : (略) あの一、私は普段会話分析をしててこういうふうにビデオで撮った会話の特徴一を分析してるんですけども、その話してる時っていうのは一、普通に一会話が成立一、コミュニケーションが成立してて一何ら問題は発生していない、だけど会話収録したあとに一人一人にフォローアップインタビューとしてこの時どーだった一てインタビューしてみると、いや実はねっていうことが結構出てきて一、表面上何も起こってなかったのに一、2人の間で一、

解釈が違ってらってということってかなりあります，だからー，私の専門から考えたらー，そういう気づかない，会話ってすぐ消えてしまいますから，そんな誤解がちょっとずつ起こって気がついたら，あらぬ意味の変化になってたってこともありえるんじゃないかなーとゆー，証拠無いからいえないんですけどー，これ以上，はははっはっは，と思いますけど。

例（14）は，解説の発話04の出現部である。IがTに，ある表現が本来とは違う意味で使用されてもコミュニケーションは成立するかと確認を行う（984 I，986 I）。Tは，ある表現を選択した人達同士であればと限定して，意思疎通に問題はないとIの発話内容を言い換える。さらに，その言い換えは従属節であり，むしろ主節で解釈の違いが言語上の評価にとどまらず，表現の使用者の人格の評価につながりうる危険性を主張している（987 T）。つまり，被引用部は，Iの発話を条件をつけて限定した上でTが言い換えた部分であり，主節でTが述べようとした中心的な内容ではない。

例（14） 言い換えの利用（撮影中）

984 I：逆にこのー（T：ん），間違っとるけどー。

985 T：うん。

986 I：これでやっぱり（T：うん）十分，コミュニケーションって（T：うん），生活の中では成立しとる。

987 T：でしょーねだって70%とかの方々がー，こっちだーって選ばれたのであるからー，この方達にとっては何ら問題なく，ただー第三者が見た時に評価が異なるーということですよ，それがー人格否定になったら嫌だなっつと，思います。

例（15）は、解説の発話05の出現部である。まず、IがTに対し、日常会話では「ニュアンスで受け取る」ことが多いと同意確認要求を行う（918 I, 920 I）。TはIの意図が理解できず、「どういうこと」であるのかと、例（11）と同様に逆にIに質問を行う（921 T）。この結果、Iが「ニュアンスで受け取る」ことについて説明を行い、Tがあいづちをうつという、インタビューの取材者と専門家の役割関係が逆転したやりとりとなる。Iの説明後、TはIの説明内容を抽象的に言い換え（948 T）、ニュースではこの言い換えの一部が引用される。Tは調査結果に言及しておらず、断定を避けて可能性として述べ、むしろ、958 Tで解釈のずれの分析の面白さを主張している。なお、例（14）（15）より、放送時には連続する発話01～05も、取材では発話05が04より先に出現していることがわかる。

例（15） 異なる言及対象の利用・言い換えの利用（撮影中）

918 I：ニュアンスで受け取る。

919 T：うーん。

920 I：ってことって、やっぱり多いんですよ、会話。

921 T：ニュアンスで受け取ることって（I：うーん）どういうことだろ。

922 I：例えば。

（中略）

943 I：いわれたほうとしても（T：うん）、ニュアンスでなんとなくわかって。

944 T：うーん、そうですね。

945 I：ますよねー。

946 T：うんうんうん。

947 I：意味としたら本来とは違う（T：違うけど）んだけども。

948 T：まーそういうことなんですよそのー、語ーそのものの意味

よりも一、そこでのコミュニケーションの意思疎通を成立させることの方が重要であって、ある1つの語彙に対しては、管理を及ばせない、ということです、うん、それは、よくあることかなーと思います。

(中略)

958 T : かなー、ふっふっふっふ (I : ははは), ふーん (I : ん), でそこーはどう変化してるのかなーって調べるのがー、面白いーと思いますけど。

「解説」の撮影後 ([5] 撮影・雑談), I は T に書架の前で本を読む専門家カットの撮影を求める (例 (16))。T は書架の前で本は読まないと主張し, 他のカットの可能性を質問で探る (1528 T, 1547 T, 1551 T)。T は質問によって固定的な役割の演出に抵抗を提示しようとしたものであった。しかし, I は, 「イメージ」「恰好だけ」と述べており (1527 I, 1552 I), 専門家のイメージの再構成に対する問題意識はないと考えられる。

例 (16) 専門家カットの撮影と T の情報要求 (撮影後)

1521 I : 先生これだけ撮っていきましようか。

(中略)

1526 T : 私の普段の研究ってそれじゃない (笑) それをねー。

1527 I : イメージですから。

1528 T : イメージ (I : ねー) ですか, イメージ変えません ↑
(後略)

(中略)

1547 T : うーん, えーまじっすかー。

(中略)

1551 T : やっぱ読まなきゃダメですか, 論文探してるところはダメ

ですか。

1552 I : 格好だけちょっと。

以上、取材の談話の全体の流れを確認したうえで、ニュースに引用された専門家の解説の発話が、取材の場面ではどのような文脈で発話されていたのかを会話例で確認した。I には自身が志向する世論調査のニュースの構成があり、解説の発話の撮影中だけでなく、撮影前後においても、そのニュースの構成に必要な要素を収録すること目指していると考えられる。

5. 考 察

取材の談話とニュースの談話という2つのデータを対象に、ニュースの構成と両データの引用関係という2つの分析を行った結果、ニュースにおける現実の再構成の実態とその特徴として次の3点が指摘できる。

1点目に、ニュースの構成の分析から、世論調査の問題の解説を専門家が行って解決するという、I が志向していたと考えられる世論調査のニュースの現実が再構成されていた実態が指摘できる(例(1)~(10))。そして、このニュースの構成により、2つのステレオタイプが形成されていると考えられる。1つは、世論調査が慣用句などの正誤判断のみを扱っているというステレオタイプである。もう1つは、定延(2008)が指摘するような「言葉の専門家」の役割に対するステレオタイプである。実際、取材の談話においても、I がTに対して、「言葉の専門家」の役割を求める発話が観察された(例(12)(16))。つまり、世論調査がニュースの構成によって調査の一部が強調された現実として再構成され、その再構成において2つのステレオタイプが強化されていると考えられる。

2点目に、2つの談話を比較した引用関係の分析により、専門家の解説は世論調査に直接的に言及しているわけではない発話が部分的に利用

されている実態が明らかとなった（例（8）（13）（14）（15））。その引用における発話の利用のしかたの特徴として3点指摘できる。まず、①世論調査ではなく、専門家が別の内容について言及する発話が利用されている（例（13）（15））。次に、②取材者の質問に対し、専門家は可能性として答えてはいるが、文末のモダリティが削除されて命題内容が断定された発話を利用されている（例（13））。さらに、③取材者の発話を、専門家が言い換えた発話を利用されている（例（14）（15））。以上の3つの特徴を持った引用により、専門家の解説は、取材の場面における発話の直接引用であっても、ニュースでは取材の場面の文脈を離れた現実として再構成されていたといえる。

3点目に、取材の場面において、専門家に対するインタビューという制度的談話のやりとりとしては逸脱が発生していたといえる。取材の談話では、Iが質問をしてTが情報提供を行うだけでなく、Tが質問を行ってIが答えるためにTがあいづちや繰り返しを行うというやりとりが観察された（例（11）（15））。つまり、取材の場面において、Iには1点目に指摘したような世論調査に対するニュースの構成が既にあり、Tにその構成に沿った解説を発話してもらうことがIの取材の目的であったと考えられる。しかし、TがそのIが期待する解説を述べなかったため、Iが自らの志向する解説を情報提供で提示することとなり、取材者と専門家の役割関係が逆転するやりとりの現象が発生したと考えられる。このため、2点目に指摘したような引用の方法によって、解説を再構成することとなったと考えられる。

6. 結論と今後の課題

本研究では、世論調査に関する取材の録音・録画データと放送されたテレビニュース録画データという2つのデータにより、メディアが独自の様式で現実を再構成していく実態とその特徴を明らかにした。特に、

2つの会話データの比較から、専門家の取材の場面における発話がニュースにおいて実際に引用されてはいても、世論調査の結果に対する直接的な言及以外の発話を解説として部分的に利用している点を実証的に明らかにした。この結果、取材場面と放送の場面に乖離が発生した状態で、世論調査に関する現実がニュースで再構成されていたと考えられる。実際、Tはニュース視聴時、確かに自らの発話が直接引用されてはいるが、何かが違うという印象を持った。取材の発話がニュースに引用されてニュースにおける現実が再構成され、元の取材の場面の文脈を知るTには引用後に再構成された現実に対する違和感が発生したと考えられる。しかし、ニュースにおける現実のみを視聴する視聴者には、通常、文脈の異なりによる違和感を覚える可能性はないと考えられる。

本結果は、1つのニュース番組とその取材の談話を分析対象としたものであり、一般化できるものではない。しかし、メディアによる現実の再構成とそこに観察される特徴を、2つの会話データによって実証的に提示した点に本研究の特徴がある。今後は、同類のデータを収集して量的分析を行い、本研究の結果を検証する必要性が指摘できる。その際、本稿では専門家の視点からの分析となっているが、今後は取材者側へのフォローアップ・インタビューを行うなどして、双方の視点をふまえた多角的な分析を行わなければならない。その結果を、メディア・リテラシー（鈴木編 1997）の教育活動に活用することで、視聴者には見えにくい現実の再構成やステレオタイプの強化に関する問題を、会話データを用いて具体的に提示することが可能になると考える。

例えば、筆者の社会言語学の授業では、YouTubeにある芸能人のノーカット版のインタビューを文字化し、ニュース番組との引用関係をテレビ局間で比較分析した受講生がいた。限られたニュースの時間に伝えられた現実の背景に、伝えきれないインタビューでのやりとりがあることを、会話データから具体化する活動につながったと考えられる。会話データを利用したメディア・リテラシーの教育活動により、ニュースの

「わかりやすさ」を優先させて事実を単純化し、現実を再構成するのではなく、単純化できない現実があり、その現実を自分なりに理解し、どのように対応するのかを自分で考えていく能力の育成につなげたいと考える。これにより、ステレオタイプの修正にもつながりうると考える。

さらに、今回のような分析結果を積み上げていくことで、メディアの関係者と大学教員などの専門家との相互理解をつくっていくきっかけになればと考える。今回の取材者のIも決して悪気はなかったものの、結果としてはIとTのコミュニケーションが十分ではなく、メディア側の現実の再構成につながってしまった。このような実態を会話データによって提示することで、メディアの関係者と専門家、また広く専門家以外の人も、互いの関係や現実の再構成について意見交換ができるようになればと考える。

注

- 1 2009年度から2012年度の社会言語学Ⅱの授業（選択科目）において、4年連続で同じ質問を行った。
- 2 現在、談話分析、会話分析、ディスコース分析など名称は様々ではあるが、会話データを用いて、その会話が行われる文脈をふまえた談話レベルの研究が様々な研究分野で数多く行われている。中井（2012）では、こうした談話レベルの会話データを分析対象とした研究を「会話データ分析」として包括的に捉え直している。
- 3 電話での取材の依頼時には、筆者の専門が日本語教育であり、必ずしも取材者の期待するようなコメントはできないことは伝えていた。また、本電話では、取材者が街頭インタビューを先に行い、その映像を見てコメントを述べるという話であったが、実際の取材は、事前の連絡なく、街頭インタビュー前に行われた。

文字化の規則

(T：うん)	() 内はターンを取得しない発話者と発話
(笑)	笑いなどの非言語行動
。	ターンの終了
,	ごく短いポーズ
↑	上昇イントネーション

参考文献

- 飯田卓・原知章編（2005）『電子メディアを飼いならす』せりか書房
- 伊藤学編（2006）『テレビニュースの社会学』世界思想社
- 大石裕・岩田温・藤田真文（2000）『現代ニュース論』有斐閣アルマ
- 大場美和子（2010）「取材の談話とテレビニュースの談話の比較—「国語に関する世論調査」に対する「専門家」の解説のつくられかた—」『社会言語科学会第25回大会論文集』社会言語科学会 pp. 244-247
- 大場美和子（2011）「テレビニュースの取材の談話における話題と質問の分析—「国語に関する世論調査」に対する「専門家」の解説のつくられかた—」『社会言語科学会第27回大会論文集』社会言語科学会 pp. 204-207
- 岡井崇之（2004）「言説分析の新たな新展開—テレビのメッセージをめぐる研究動向」『マス・コミュニケーション研究』64 日本マス・コミュニケーション学会 pp. 25-40
- 鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房
- 草野厚（2000）『テレビ報道の正しい見方』PHP 新書
- 小玉美意子編（2008）『テレビニュースの解剖学—映像時代のメディア・リテラシー』新曜社
- 小林裕・飛田操編（2000）『【教科書】社会心理学』北大路書房
- 定延利之（2008）『煩惱の文法』ちくま新書
- 鈴木みどり編（1997）『メディアリテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
- タックマン・G 著、鶴木眞・櫻内篤子訳（1994）『ニュース社会学』三嶺書房
- 中井陽子（2012）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- ニューマン、W. R.・ジャスト、M. R.・クリグラー、A. N. 著・川端美樹・山田一成監訳（2008）『ニュースはどのように理解されるか』慶應義塾大学出版会
- 萩原滋編（2007）『テレビニュースの世界像』勁草書房
- 文化庁文化部国語課（2008）『平成19年度 国語に関する世論調査 日本人の国語力と言葉遣い』ぎょうせい
- 山登義明（2000）『テレビ制作入門』平凡社新書
- 好井裕明・山田富秋・西坂仰編（1999）『会話分析への招待』世界思想社
- Clayman, S. and Heritage, J. (2002) *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*. Cambridge University Press